

# 私の白い空

彌永 たたえ

新年を前に試作品の凧が空にあがる。

と二行書けば、冬の年中行事の一場面を構成するこまごまとした小道具も同時によみがえってくる。糊や和紙、凧を作るための材料は、日本間で障子の張り替えをしていた母からわけてもらったのだろう。今よりも小さな版の官製ハガキ、桃色の桜が消印のあたりに印刷されたハガキを二つ折りにして凧糸を巻き付けてい

たような気がする。実際に空に揚がるような立派な凧を完成させたのはすでに小学校に通っていた兄だけで、私は糊でべとべとに丸まった和紙の塊を家の中にうち捨てて、兄と兄の作った凧の後を追って走るだけだったかもしれない。その頃のことに関しては、曖昧なままぼやけている部分と、経過した年月の割には驚くほど鮮明な部分とが同じ重さで記憶の中に残ってい

る。兄が自分で作った風になん色もどんな模様を描いていたのかは憶えておらず、その時私が家の前の空き地を走りながら、履いていたタイツがずり落ちてくるのを心配していたことにはかり確信がある。灰色の縄編みのタイツの伸縮は、私の成長に追いつけず、引つ張つても引つ張つても、股の補強部分が太股のあたりまで落ちてきてしまうのだ。

忘れてしまったことがつまらないことで、憶えていることが大事なこととは言い切れない。その時兄が作った風は、たとえ私が憶えていなくても素敵な風だったかもしれないし、タイツがずり落ちてくる感覚の生々しさには価値の与えようがない。そして、不鮮明な映像としてすら思い浮かべるのできない、年末の真つ白く張りつめた空は、私の語る「年末の真つ白く張りつめた空」という「言葉」でしか残っていない。記憶の中で、「確かなこと」と「忘れてしまったこと」が順位を争わずに同居する。その他に、「忘れ

てしまったことさえも忘れてしまったこと」が全体の雰囲気を支える。

さらに古い記憶に遡れば、「確かなこと」と言えることがほとんど無い。父に連れられて荷物を引き取りに行った汐留貨物駅構内のほの暗さ、横浜港を出ていく船と船長さんの家で食べた夕飯、慶応病院の通用口で割れていた薬瓶の破片にへばりついた桜の花びら。

御殿場の軍人住宅に祖母が届けてくれた子供雑誌と食卓の上の山羊の乳。どれもこれも「言葉」だけが残り、実際の映像は暗く沈んで遠ざかっていく。「曖昧な記憶」が「忘れてしまったことさえ忘れてしまった」ような物たちに包まれて去って行くのを少し寂しい気持ちで見送るばかりである。

私は両親が二人ともに職業的保育者であり、十代後半から二十代前半にかけて、両親のつけてきた家庭保

育の記録を目にする機会があった。もちろん研究者としての本筋に沿っての記録であるから、私が執着する過去へのノスタルジーとは無縁の内容である。そのことは承知のこととしても、当事者として私の登場する保育記録を読んだ第一印象は、「どうしよう、全然憶えていない」であった。通っていた幼稚園の地理的な位置や、家屋の構造は一致するとしても、記録の文面からうかがわれる、家庭生活を続ける上での両親の努力、性懲りもないような楽天的けなげさを子供の頃の私は感じたことがなかった。雨の日に退屈して苛立た子供たちをもてあましかける様子、姉妹喧嘩や登園拒否。どこを読んでも、「本当にそんなことあったわけ」という思知らずな感想ばかりが先に立った。両親の存在など「空気のように」しか思っただけであったのである。両親が最善を尽くして子育てをしてきたこと、これらもとても大きな「忘れてしまったことさえ忘れてしまったこと」なのかもしれない。

最後になってしまいしたが、読者の皆さんに感謝の気持ちを伝えたいと思います。十二年間担当してきたカットの連載が今号で終了いたします。読者の方々の大部分が保育者であられる『幼児の教育』で、「空気のような」スタッフと安心して作業を続けられたことは幸運でした。スランプの時にも、「うまく描けないけれど、どうしても描きたいもの」にこだわったり、心配ばかりお掛けしましたが、愛着のある作品が数多く生まれました。

読者の皆さん、長い間、本当にありがとうございました。

